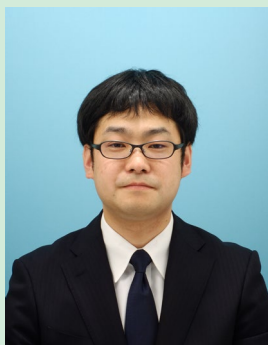


職場の方々への感謝を感じた育休



鈴木 宏昭
地域教育文化学部
准教授

産休・育休取得期間
約1ヶ月
(2019.5 - 2019.5)

出産
2019.2 (第2子)

【産休・育休に入るまで】

妻の妊娠が判明してから、2018年度当時の学部長に相談して育休を取ることにしました。まだまだ男性教職員の育休取得者がほとんどおりませんが、学部長には私の育休取得をご理解いただき、育休取得にむけていろいろと配慮いただきました。学部長からの留意点・アドバイスは、「育休期間中に、くれぐれも学生に迷惑をかけないように、学生対応については十分に準備するように」ということでした。

担当授業については、基本的に育休期間を除いて学期中に授業実施日程を一部変更して対応を行うこととし、代替の非常勤講師を依頼しませんでした。学生対応については、当時担当していた学生アドバイザーをコースのコース代表教員に担当していただくことになりました。コース代表教員の先生にもご協力いただき、大変お世話になりました。

【産休・育休に入ってから】

育休に入ってから、基本的に家事・育児に専念しました。育休開始直後、当分の間、教育・研究から離れることに不安を感じましたが、あまりの家事・育児の忙しさでその不安もすぐなくなりました。

育休期間中は、子供たちと多くの時間を共有することができました。私は基本的に第1子(3歳)の育児をすることが多かったです。

【産休・育休が明けて】

育休期間が1カ月間だったこともあり、比較的スムーズに復帰することができました。私自身が育休を取ったことにより、以前にもまして、職場にて忙しく子育てに取り組んでいる教職員の方々のことが気になるようになりました。

【最後にひとこと】

私が育休をとって改めて気づいたことを一つだけお話しさせてください。近年、産休・育休を取る方向けのサポートが年々充実しているように思います。その一方で、産休・育休を取得する教職員の周りの人(同じ部署の同僚など)のサポートもまた必要であると強く感じました。本学の場合、担当業務の特殊性もあってか、どうしても産休・育休取得者の周りの方々に負荷がかかってしまうことがあるかもしれません。産休・育休取得者とその周りの教職員へのサポートがセットで行われることが必要ではないかと思いました。私自身は、幸いにも、職場の上司・同僚に恵まれ、私自身の育休についてご理解とご協力により、安心して育休を取得することができました。

私の体験談が皆さんのお役に立つことがありましたら幸いです。この度の体験談の執筆を通じて、数年前の事でしたが、当時の状況を振り返りまして、忙しくもとても幸せで充実した日々であったことを思い出すことができました。貴重な機会をいただきありがとうございました。